資 料

イエバエ及びクロツヤハナバエ上に 見出された *Aspergillus* 及び *Mucor* 属菌について

Aspergillus and *Mucor* found on house fly
and *Ophyra calcogaster* Wiedemann

白 井 良 照*
Yoshiteru Usui

前報に記載した菌種は *Scopulariopsis rubellus* Bainier であるが、その後、同属でイエバエ (*Musca vicina*) 死体上に次の菌種が連続して発生して居り同属菌が極めて普通に死蝇上に見出される事が判明した。前報に述べた如く、死体の有機窒素源を高度に利用するためと思われる。

Scopulariopsis brevicaulis (Sacc.) Bainier

Scopulariopsis brevicaulis (Sacc.) Bainier var.
glabra Thom.

両者共、発育は前報の *Scop. rubellus* と酷似し、顕微鏡相違のみで異なる。共に蝇からは未だ見出されて居ない。

今回は上記菌類以外に見出された2種類に就て報告する。

(1) *Aspergillus* 属

当研究所でイエバエ (*Musca vicina*) を飼育中であるが、飼育中死んだイエバエをシャーレにとり 28°C の恒温器中に3週間放置した処、その上に黄色の夥しいカビの発生を見た。本菌を純粋に分離、同定し得たので、茲に報告する。

Aspergillus flavus Link

Aspergillus flavus Link

ツァペック寒天上、発育良好、平滑、白色から黄緑色となる。裏面白色、分生孢子柄は直立、9-13 μ 幅、表面は粗粒状、長さ 300-500 μ 、頂囊は 10-40 μ 幅、梗子は凡二段に分れ、基梗は 7-9 $\times$ 3-5 μ 、端梗は 7-10 $\times$ 2.5-3.0 μ 、時として単梗となる。

分生孢子は球形、粗粒性、3.5-5 (6) μ 黄緑色菌核は見出されない。

本菌は自然界に広く見出され²⁾、*Asp. oryzae* (麹菌) とは区別頗る困難とされている。昆虫に寄生する事多く野生昆虫上にも時々見受けられるが、特に蚕上では稚蚕の重要病原菌であつて、褐僵病、麴病等の病原菌として知られている。従つて蝇に寄生する事は病原菌の伝播上興味ある処である。

(2) *Mucor* 属

昨年8月、筆者の野生昆虫の採集目的で富士山麓吉田口周辺を歩いた際、路傍の糞 (ムササビのものと思われる) の傍に蝇の死骸が落ちて居り、その上に白色毛状のカビが発生して居るのを採取した。蝇は同糞に由来するものと考えられ、クロツヤハナバエ (*Ophyra calcogaster* Wiedemann) であつた。

同蝇死骸の試料を研究室に持ち帰り、検鏡の結果、*Mucor* (毛カビ) の仲間であつたので早速 Malt agar 平板を用い純粋分類を行い検索した結果を報告する。

Mucor ambiguus Vuillemin: Zycha, Mucorineae p. 67, Leipzig (1935)

麦芽寒天上、発育は良好、菌叢は白色から灰黒色、黒色となり、毛状で高さ 1 mm より時として 5 mm 以上に及ぶ。孢子囊柄は直立、互生に分岐、各分岐の先端に孢子囊を着生する。孢子囊は球形、灰黒で径 100 μ 内外、孢子囊の外膜は少時の後、熟成度に依り、破れ去る。中軸は球形、孢子囊孢子は楕円形、4.5-7 μ 粗面で

Mucor ambiguus Vuillemin

* 株式会社小林脳行 K. K. Kobayasi Noko.

ある。接合孢子は見出されない。

イエバエに接種した *Mucor ambiguus* Vuillemin

Mucor 属菌は昆虫寄生菌として重要なものは少いが³⁾ 文献上からは *M. mucedo* L. が蜜蜂を侵害し(欧州)⁴⁾, *M. hiemalis* Weh. も蜜蜂に強い病原性を示す(北欧)⁵⁾. 亦, *M. racemosus* Fres., 及び *M. silvaticus* Hag. は蚕の病原菌⁶⁾ と云われている。

本菌種 *M. ambiguus* は上記の何れとも異なるが *M. mucedo* に近い性質を持ち, 自然界に広く分布する菌種であるが, 菌株上, 即ち Strain に生態的差が存在する様に思われる。

参考文献

- 1) 臼井良照(1959): 衛生動物, **9**(3): 198-199. — 2) Thom, C. & K. B. Raper(1945): The Aspergilli, Baltimore. — 3) Zycha, H. (1935): Krypt. Fl. Mark Brandenburg, VIa Pilze 11. — 4) Steinhaus, E. A. (1949): Principles of Insect Pathology. — 5) Burnside, C. E. (1935): A disease of young bees caused by a *Mucor*. Amer. Bee J. **75**: 75-76. — 6) Malucelli, P.: Boll, R. Stag Sper Gelsicol Bachicol **18**(2): 41-71.

Orthellia pacifica Zimin, 1951 について

On the occurrence of *Orthellia pacifica* Zimin in Japan

堀 克重¹⁾ 牛越 久²⁾
Katsushige Hori Hisashi Ushigoshi

日本本土で記録されている *Orthellia* 属のハエは *O. latipalpis* Zimin 一種である(堀, 1956). ところで著者の一人牛越は 1959 年 8 月 5 日から 16 日までの間に, 青森県八甲田で上記の種類と異なる *Orthellia* 属の他の一種

を採集した。著者らの研究では, 本種は *Orthellia pacifica* Zimin (新称エゾタカネミドリバエ) と同定すべきものであろうということになった。著者らの八甲田産の標本は Zimin (1951) の *O. pacifica* の記載に重要な点ではよく一致していると共に, 一方 *O. cornicina*, *O. caesarion* 等の近似種とは Zimin の指摘するような点で明かに区別される。また八甲田では *O. latipalpis* は見られず, 代つて *O. pacifica* がごく普通であり, *Musca hervei*, *Myiospila mediatubunda* 等と共に牛糞上で採集される。それ故本種は分布の上からも *O. latipalpis* と異なるもののようである。

なお Zimin (1951) は *Orthellia pacifica* を, ウラジオストック等のソ領極東の数カ所からの標本に基づいて記載しているので, 本種が我が国の東北地方の山地にまで分布していても不思議ではない。本種と *O. latipalpis* との重要な区別点を示せば次のようになる。

表 1 日本本土産 *Orthellia* 属 2 種の比較

		<i>Orthellia pacifica</i>	<i>Orthellia latipalpis</i>
額	♂	離眼的で, 複眼間は触角, 第 3 節の幅の約 2 倍, 側縁部は藍色に輝く	合眼的で, 左右の側縁部は相接着する
	♀	複眼間は 1 複眼の幅より僅かながら広い額帯は側縁部より狭い	複眼間は 1 複眼の幅より狭い額帯は側縁部より広い
複眼		♂ の上半分の個眼は僅かに大きい	♂ の複眼の上半分の個眼は他の部分の個眼より著しく大きい
体色		藍色に輝く。胸背前方に縦条はない	緑色又は帯藍緑色, 胸背の前方に不明瞭な 4 縦条がある
亜背毛		0~1+2	2+3
腹側板剛毛		1+2~3	1+3
外部生殖器		雄の前鉗子は小さい。産卵管の形態は <i>O. latipalpis</i> のそれと大差ない	雄の前鉗子は大きく, 先端はバチ状
翅		m 1+2 の彎曲は <i>musca</i> のそれに近い	m 1+2 の彎曲は <i>Dasyhora</i> のそれに近い
脚		前腿節後面と後腿節前面は藍色に輝く	黒褐色

最後に御指導を頂いた東北大学教授加藤陸奥雄先生に感謝の意を捧げる。

文 献

- 1) Zimin, L. S. (1951): Fam. Muscidae (Tribe Muscini, Stomoxydini) in Fauna USSR, **18**(4): 75-90, (in Russian).

- 1) 金沢大学理学部動物学教室
Zoological Institute, Faculty of Science, Kanazawa University
- 2) 東北大学理学部生物学教室
Biological Institute, Faculty of Science, Tôhoku University